

5. 北京 2022 大会におけるハイパフォーマンス・サポート事業

鈴木 章*

●はじめに

国際総合競技大会(オリンピック,パラリンピック等)では選手村の中に宿泊施設の他,ダイニング,ポリクリニック等が設置されており,銀行,クリーニング,ヘアサロン,郵便局など生活に必要な環境も整備されている.ポリクリニックでは内科,整形外科,歯科,眼科などの診療科,臨床検査,画像検査,調剤薬局,および理学療法などが運営されている.

選手村の中には生活に必要な環境が概ね備わっているが,選手自身が実力を発揮するためには日常生活に近い環境を整えることが重要である.海外での試合なのでアウェイではあるものの,ホームゲームに近い環境を整備することでより高いパフォーマンスを発揮することが可能になると考えられる.

今回は2022年北京オリンピック・パラリンピック大会において,選手・スタッフが競技へ向けた最終準備を行うために必要な環境を提供する場として村外サポート拠点を設置し,サポート活動を行ったのでその内容について報告する.

●ハイパフォーマンス・サポート事業

日本スポーツ振興センター(以下,JSC)は,2010年広州アジア大会のトライアルを経て,オリンピックでは2012年のロンドン大会から冬季を経て6大会連続,パラリンピックでは2016年のリオ大会から4大会連続で日本代表選手およびスタッ

フのための村外サポート拠点を開催国に設置,運営してきた.

村外サポート拠点とは,スポーツ庁のハイパフォーマンス・サポート事業(以下,HPS事業)の一環として日本代表選手のメダル獲得の優位性を高めるため,過去のオリンピック,パラリンピック競技大会を通じて蓄積したノウハウ,情報などをもとにコンディショニングに配慮したスポーツ医・科学および情報面からの総合的なサポートを実施するための拠点である.普段アスリートが活動拠点としているハイパフォーマンス・スポーツセンター(以下,HPSC)に類似した環境を大会開催地に再現し,選手やスタッフが普段利用しているサポート機能の中から必要なものを選択し,競技へ向けた最終準備を行うための環境を提供している.

●感染症対策

東京2020大会は新型コロナウイルス蔓延の影響で1年延期となり,2021年コロナ禍での開催となった.特徴的だったのは選手村には発熱外来が設けられ,バブルと呼ばれる行動規制をかけ,一部を除き無観客での開催となった.

北京2022大会では感染症拡大予防対策として,毎日の検査実施とクローズドループと呼ばれる行動規制が行われた.東京大会より厳格に行われ,ループ外へは一切出られないという過去にはない取り組みが実施された.

本来であれば,消耗品は日本国内から持ち込むより現地で調達した方がコストはかからないのだが,今回はループ外での調達が不可能であることから全て事前に準備し日本から持ち込むことになった.

* 国立スポーツ科学センター

Corresponding author: 鈴木 章 (akira.suzuki@jpn-sport.go.jp)

●村外サポート拠点

北京 2022 大会の選手村は北京地区、張家口地区、延慶地区の 3 箇所を設置された。今回の村外サポート拠点は延慶地区を除く北京地区、張家口地区の 2 地区での現地サポートと、東京のハイパフォーマンススポーツセンターにおけるオンラインサポートとして設置された。サポート拠点の運営に当たっては、スポーツ庁、ハイパフォーマンススポーツセンター、北京 2022 組織委員会等が作成した感染症対策等のガイドラインを遵守することを前提に利用者が安全・安心に施設を利用できる環境を提供した。

サポート機能の実施場所等については以下のとおりである。

- ①映像分析：張家口拠点、オンライン
- ②心理サポート：オンライン
- ③栄養サポート：オンラインおよび各選手村日本選手団宿泊棟に食環境調査について掲示
- ④トレーニング：張家口拠点および北京選手村村内に競技団体より要望の機器の手配
- ⑤コンディショニング：張家口拠点および村内支援、北京拠点と村内支援
- ⑥ランドリー設置：張家口拠点
- ⑤のコンディショニング部門の具体的な内容について報告する。

●コンディショニングサポート

村外サポート拠点におけるコンディショニングサポートは以下の内容で実施された。

- ①各競技団体（以下、NF）スタッフがケア活動できる共有ベッドやスペースの設置
- ②各種物理療法機器の設置
- ③交代浴可能な温浴と冷水浴を設置
- ④選手がセルフコンディショニングできるストレッチスペースの設置
- ⑤日本選手団本部メディカルへのトレーナー派遣
日本選手団本部メディカルの体制としては、これまでトレーナー 1 名の派遣があり、氷上競技と雪上競技の選手村を必要に応じて移動していたが、今大会においては各選手村の距離が離れており、移動が困難であること、そして感染症対策が何よりも重要であるとの判断で張家口地区、北京地区の各選手村に内科医 1 名、整形外科医 1 名の派遣とし、トレーナーは HPS 事業スタッフが入村

して村内でのサポート活動を行った。

●利用状況とメダル獲得状況

張家口地区では、村外拠点の設置と村内支援が行われた。村外拠点には交代浴可能な温浴と冷浴が設置されたこともあり、のべ 80 名の多くの選手にご利用いただいた。村内支援では本部トレーナーによる対応が 78 名、NF トレーナーによる対応が 14 名（ベッドのみ 9 名、ベッド+物理療法 5 名）であった。交代浴の設置はないため必要な場合は村外拠点を利用した。また携帯型の物理療法機器の貸し出しは 6 件あった。

北京地区では張家口地区同様に、村外拠点の設置と村内支援が行われた。村外拠点については、選手村からの交通の便が非常に悪く施設利用はなかった。村内支援については、HPS 事業スタッフの対応 11 名、NF トレーナーが利用した貸出用ケアルーム 99 名（選手、スタッフ）、交代浴が 36 名（温浴 23 名 冷水浴 0 名 交代浴 13 名）、機器貸出が 1 件であった。

北京選手村には NF のトレーナーが滞在しており、本部トレーナーによる対応は少なかった。村外に滞在している NF トレーナーもおり、選手の居住スペースでのケアではなく、貸出ケアルームの利用が多くみられた。

冬季オリンピックにおけるメダル獲得数はソチ 2014 大会で金 1 個、銀 4 個、銅 3 個の合計 8 個でランキング 17 位、平昌 2018 大会では金 4 個、銀 5 個、銅 4 個の合計 13 個でランキング 11 位、北京 2022 大会では金 3 個、銀 6 個、銅 9 個の合計 18 個でランキング 12 位という結果となっており、北京大会ではランキングは下がっているものの HPS 事業の取り組み後のオリンピック競技大会におけるメダル獲得数は最多となっている。

●終わりに

北京 2022 大会において、2012 年から 6 季連続で HPS 事業による村外サポート拠点を設置、運営を行った。海外で開催される国際競技大会においては、普段アスリートが利用している環境を整備することは非常に有効であると実感している。今後もこのような機会がある場合は、アスリート、NF の要望を確認し、大会運営に適した活動を実施し、安心して安全に競技に取り組める環境を整えたい。